山がらす

流れ星通信工房
三橋乙揶

ある晴れた日の
午後

輝やく稲の海から
はこばれて来る
良い匂いが

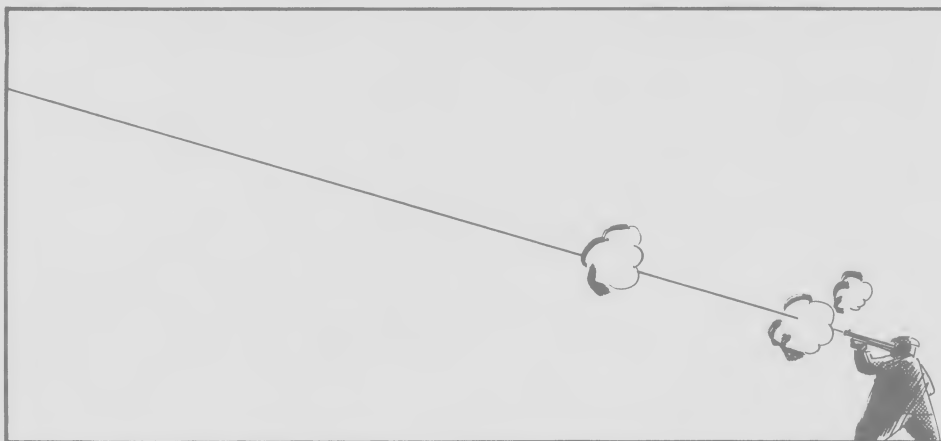
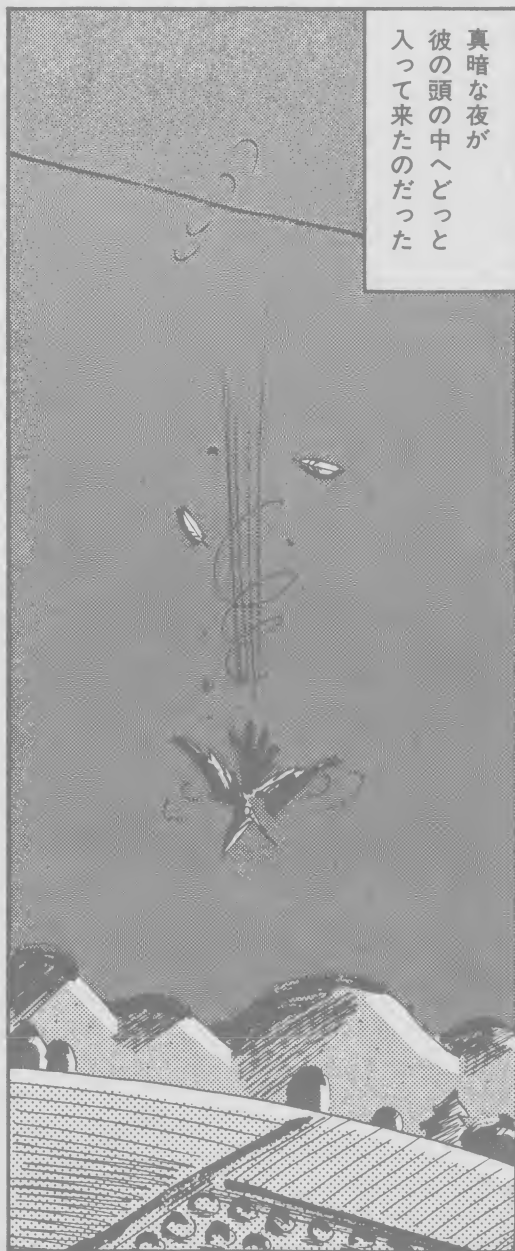
彼をなつかしい
気分にでもさせたのの
だろう

夕刻まで彼は

あちらこちらと
楽しげに飛びまわって
いたが

カー

とひと声
鳴いてみた

そのせつな
すべてが視界から
消えさったかと
思うと

真暗な夜が
彼の頭の中へどっと
入って来たのだった

それが又
なんともおかしな
気分だったが
……

すぐに分からなく
なってしまった

彼はふたたび闇の中へと
飛びたって行った…

終